

# ゲーテのスピノザ論 ——汎神論論争をめぐる書簡を中心に——

## Goethe's Spinozism — with Focus on Letters related to Pantheism Controversy

文学研究科人文学専攻博士後期課程在学

ツグラッゲン・エヴェリン

Evelyn Zraggen

### 目次

はじめに

序 章 ゲーテがスピノザを研究した時期

第1章 ヤコービの『スピノザの教説について』の出版前の書簡（1783年?1785年）

第2章 ヤコービの『スピノザの教説について』の出版後の書簡（1785年?1786年）

おわりに

引用文献及び参考文献

### はじめに

本研究ノートはゲーテがスピノザの思想から受けた影響に関する書簡を集めて、多少の注釈を付したものである。既に翻訳があったものはそのまま引用した。訳がない場合は筆者が訳し、原文もドイツ語で載せた。

長い人生にあつて、ゲーテは様々な人物から影響を受けた。1816年11月7日にワイマールで書かれたカール・フリードリヒ・ツェルター宛の手紙の中で自分が大きな影響を受けた三人の人物を取り上げ、「この頃私はまたリンネを読んで、この非凡な人間に驚かされました。私が彼から学んだものはじつに無限と言うべきで、植物学のことにはとどまりません。シェイクスピアとスピノザを別とすれば、個人のなかでこれほど大きな影響を受けた人を私は知りません」<sup>1</sup>と述べている。そして『詩と真実』の第三部第十四章の中にゲーテは彼に決定的に影響を与えた人物について次のように述べている。

これほど決定的に私に働きかけ、私の考え方の全体にあればほど大きな影響をあたえたこの人物は、スピノザであった。つまり私は自分の特異な本性を陶冶する手段をあらゆるところに探し求

---

<sup>1</sup> ゲーテ（1981）『ゲーテ全集 15』 184 ページ。

めて得られなかったその果てに、とうとうこの人の『エチカ』にめぐり合ったのである<sup>2</sup>。

このようにゲーテはスピノザから決定的に働きかけられたのである。『ギョオテ伝』の中に森鷗外は「哲学」という随筆の冒頭で、ゲーテと哲学との関係について「ギョオテ<sup>3</sup>はスピノザ (Spinoza) 派の一人である。併しスピノザの書を読まぬ前から同一思想を持っていた」<sup>4</sup>と述べている。森鷗外によるとゲーテはスピノザ派の一人であり、若いころからスピノザの影響を受け、生涯スピノザ派を離れなかったのである。エッカーマンの『ゲーテとの対話』<sup>5</sup>の中でゲーテは彼がスピノザから受けた影響を最晩年でも述べている。

ゲーテのスピノザに対する考えの多くは『詩と真実』の記述、そして書簡から見受けられる。ゲーテは当時の知人への書簡を通して、スピノザの思想について頻繁に議論していた。書簡を通して当時のゲーテの考え方や心情が良く分かるだろう。本研究ノートでは書簡の中で行われた議論を詳しく調べ、ゲーテがスピノザについて言及している代表的な書簡の箇所を、そして時間軸に沿って取り上げていく。

## 序章 ゲーテがスピノザを研究した時期

ゲーテはいくつかの時期にスピノザを研究した。1770年1月-3月の *Ephemerides* 『ゲーテのエフェメリデス』の中で彼はスピノザの名前を初めて取り上げた。次にスピノザを研究したのは1773年から1774年までの時期である。1773年の夏になって、ゲーテはスピノザの書を読んで、一生涯にわたってその思想から影響を受けた。1773年の秋と1774年の秋の間にゲーテが「プロメトリス」という詩を記した<sup>6</sup>。

一番集中的にスピノザを研究したのは1783年と1785年の研究時期であった。ゲーテはワイマールで1783年から1785年までに、ヨハン・ゴットフリート・ヘルダーやシャルロット・フォン・シュタインと共同で研究していた<sup>7</sup>。この研究によってゲーテの世界観の基盤が作られ、彼の詩観、人間観、宗教観と自然観の多様性を包括的に捉えるようになった。汎神論論争が起こった1785年頃には既に同時代人との数多くの書簡が見られる。1785年に汎神論論争によって喚起されたと共に、当時のドイツ語地域でのスピノザ受容が始まったと思われる。この汎神論論争は、ヤコービの無名の『スピノザの教説について』の出版によって開始された。この作品においてヤコービはスピノザ主義を無神論と称した。最初にモーゼス・メンデルスゾーンとヤコービの往復書簡から、ヤコービの書簡のみが作品

<sup>2</sup> ゲーテ (1980) 『ゲーテ全集 10』 178-179 ページ。

<sup>3</sup> ゲーテのこと。

<sup>4</sup> 森林太郎著 (1924) 『鷗外全集 9』 599-560 ページ。

<sup>5</sup> エッカーマン (2001) 『ゲーテとの対話 (中)』 259-260 ページ。

<sup>6</sup> 参照 FA 2, 1105

<sup>7</sup> 参照 FA 2, 1173

の中に載せられた。二人の間の論争はゴットホルト・エフライム・レッシングのいわゆるスピノザ主義をめぐってであった。ヤコービが目指したスピノザ主義からの離脱はこの作品の出版によって実現されず、逆に特に若い世代がスピノザの哲学を研究し始めた<sup>8</sup>。

その後、論争は落ち着きを見せ、ゲーテはスピノザの研究を一旦中断した。次に研究を再開したのは、日記に書かれてあるように 1811 年から 1813 年の時期であった。そのきっかけとなったのは『詩と真実』の執筆のためであった<sup>9</sup>。

次の二つの章では主に 1783 年から 1785 年の時期の書簡、つまりヤコービの『スピノザの教説について』の出版前と後に分けての汎神論論争をめぐる書簡を紹介する。

## 第 1 章 ヤコービの『スピノザの教説について』の出版前の書簡（1783 年～1785 年）

ゲーテがヤコービと知り合ったのは 1774 年 7 月 22 日であった<sup>10</sup>。彼によってゲーテはスピノザの哲学を熟知したのである。この出会いについてはゲーテが『詩と真実』においても述べている。二人は 1774 年に親しくなり、議論が続いていたが、主に思想の相違のため、結局のところゲーテがヤコービから距離を取るようになった。

出会いから 10 年後、汎神論論争の時代に入り、ゲーテはスピノザについて様々な人物と書簡のやり取りをしている。ここではヤコービとの書簡のやり取りを含めたいくつかを紹介する。

Goethe an F.H. Jacobi

DI. 30.12.1783

„Wir haben uns mit dir und Lessing unterhalten. Herder wird dir geschrieben haben. Er ist diesen Sachen auf dem Grunde. Wir haben jetzt sehr gute Abende zusammen.“<sup>11</sup>

フリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービ宛

(火) 1783 年 12 月 30 日

我々はあなたとレッシングと会談した。ヘルダーは君に（これについて）書いたはずだ。彼はこれに関して詳しい。我々は今一緒にとても充実した夜を日々過ごしている<sup>12</sup>。

ここでは、ゲーテがヤコービの「スピノザ書」*Spinoza-Schrift* に関して発言している。この書は以上に述べた『スピノザの教説について』の原稿であり、1785 年にヤコービによって出版された。この書によって、ヘルダーとゲーテは汎神論論争が始まる前にスピノザについて深く研究することができ

<sup>8</sup> 参照 *Christentum und Judentum* (2012: 47-48)

<sup>9</sup> 参照 GT 5,2 584

<sup>10</sup> 参照 FA 1, 1021

<sup>11</sup> FA 2, 498

<sup>12</sup> 筆者訳 FA 2, 498

たのである<sup>13</sup>。この書の中でヤコービがレッシングとの対話についても述べているため、ゲーテは「我々はあなたとレッシングと会談した」と言っている<sup>14</sup>。ヘルダーはその時にヤコービの「スピノザ書」への返書を書いたのである。哲学者、詩人、神学者であったヨハン・ゴットフリート・ヘルダーはストラスプールの時からゲーテの先輩であった<sup>15</sup>。

次の手紙はシャルロッテ・フォン・シュタイン宛である。彼女はワイマール公国の男爵のゴットリープ・エルンスト・ヨジーアス・フォン・シュタインの妻であり<sup>16</sup>、シュタイン夫人と呼ばれた。シュタイン夫人はゲーテの親しい友人であり、ゲーテが精神的な愛を捧げた女性であった<sup>17</sup>。1784年～1785年の冬にシュタイン夫人と共にスピノザの『エチカ』をまずはドイツ語で、次にラテン語の原本を読んでいた<sup>18</sup>。この手紙は『エチカ』の読書についてである。

Goethe an Charlotte von Stein

DI. 9.11.1784

“Diesen Abend bin ich bey dir und wir lesen in denen Geheimnissen fort, die mit deinem Gemüth so viele Verwandtschaft haben.”<sup>19</sup>

シャルロッテ・フォン・シュタイン宛

(火) 1784年11月9日

今晚、君のところで、君の魂と大変に似た秘密なるものを我々は読み続けていこう<sup>20</sup>。

「秘密なるものを我々は読み続けていこう」は二人だけのスピノザの読書会のことを意味している。この研究の一つの結果はゲーテがシュタイン夫人に口述筆記させた「スピノザ研究」<sup>21</sup>という書であった。クネーベルあての手紙の中でゲーテは『エチカ』の読書について自身の感情を次のように述べている。

Goethe an Knebel

DO. 11.11.1784

“Ich lese mit der Fr(au) von Stein die Ethick des Spinoza. Ich fühle mich ihm sehr nahe obgleich sein Geist viel tiefer und reiner ist als der meinige.”<sup>22</sup>

---

<sup>13</sup> 参照 FA 2, 1025-1026

<sup>14</sup> 参照 FA 2, 1026

<sup>15</sup> 参照 Goethe (1993), 240

<sup>16</sup> 参照 FA 2, 1247

<sup>17</sup> 参照 FA 2, 1248

<sup>18</sup> 参照 G-Hb 2, 1001

<sup>19</sup> FA 2, 551

<sup>20</sup> 筆者訳 FA 2, 551

<sup>21</sup> 参照 FA 25, 863

<sup>22</sup> FA 2, 551

クネーベル宛

1784年11月11日

シュタイン夫人と共にスピノザの『エチカ』を読んでいる。彼をととても近くに感じている。彼の精神が私の精神よりもっと深く、純粹であるのに<sup>23</sup>。

さらにシュタイン夫人あてにゲーテは『エチカ』を「聖なるもの」と呼ぶことによって、『エチカ』に対する尊敬の念を表している。

Goethe an Charlotte von Stein

MO. 27.12.1784

„Gestern Abend war ich nur wider Willen fleisig und las noch zuletzt in unserm Heiligen und dachte an dich.“<sup>24</sup>

シャルロッテ・フォン・シュタイン宛

(月) 1784年12月27日

昨日意に反して勉強し、最後に我々の聖なるものを読んで、君のことを考えた<sup>25</sup>。

次の書簡の中で、ゲーテはヤコービに自身のスピノザ読書について報告している。

Goethe an F.H. Jacobi

MI. 12.1.1785

„Ich übe mich an Spinoza, ich lese und lese ihn wieder, und erwarte mit Verlangen biß der Streit über seinen Leichnam losbrechen wird. Ich enthalte mich alles Urtheils doch bekenne ich, daß ich mit Herdern in diesen Materien sehr einverstanden bin.“<sup>26</sup>

フリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービ宛

(水) 1785年1月12日

私はスピノザを練習し、何回も読んでいる。そして彼の亡骸についての闘争が始まることを待ち焦がれている。判断を下すのを避けているが、このことに関してはヘルダーとの見解が一致している<sup>27</sup>。

ここでは、ゲーテがヤコービの『スピノザの教説について』の間近な出版とともに、スピノザについて、そしてヤコービが主張しているレッシングのスピノザ主義についての論争が始まることを予想している<sup>28</sup>。ヤコービは『スピノザの教説について』の近々の出版に当たって、ヘルダーに原稿での

---

<sup>23</sup> 筆者訳 FA2, 551

<sup>24</sup> FA 2, 568

<sup>25</sup> 筆者訳 FA 2, 568

<sup>26</sup> FA 2, 571

<sup>27</sup> 筆者訳 FA 2, 571

<sup>28</sup> 参照 FA 2, 1081-1082

スピノザ主義の叙述に対しての批評をお願いした。これに関してゲーテはヤコービ宛の手紙の中で次のように述べている。

Goethe an F.H. Jacobi

DO. 9.6.1785

„Schon lange haben wir deine Schrift erhalten und gelesen. Ich mache Herdern und mir Vorwürfe daß wir so lange mit unsrer Antwort zögern, du musst uns entschuldigen, ich wenigstens erkläre mich höchst ungern über eine solche Materie schriftlich, ia es ist mir beynahe unmöglich.

Darüber sind wir einig und waren es beym ersten Anblicke, daß die Idee die du von der Lehre des Spinoza giebst derienigen die wir davon gefasst haben um vieles näher rückt als wir nach deinen mündlichen Äusserungen erwarten konnten, und ich glaube wir würden im Gespräch völlig zusammenkommen.

Du erkennst die höchste Realität an, welche der Grund des ganzen Spinozismus ist, worauf alles übrige ruht, woraus alles übrige fließt. Er beweist nicht das Daseyn Gottes, das Daseyn ist Gott. Und wenn ihn andre deshalb Atheum schelten, so mögte ich ihn theissimum ia christianissimum nennen und preisen.

Schon vor vierzehn Tagen hatte ich angefangen dir zu schreiben, ich nahm eine Copie deiner Abhandlung mit nach Ilmenau, wo ich noch manchmal hineingesehen habe und immer wie beym Ermel gehalten wurde daß ich dir nichts drüber sagen konnte. Nun verfolgt mich dein Steckbrief hierher der mir schon durch Siegel und Innschrift das Gewissen schärfte.

Vergieb mir daß ich so gerne schweige wenn von einem göttlichen Wesen die Rede ist, das ich nur in und aus den rebus singularibus erkenne, zu deren nähern und tiefern Betrachtung niemand mehr aufmuntern kann als Spinoza selbst, obgleich vor seinem Blicke alle einzelne Dinge zu verschwinden scheinen.

Ich kann nicht sagen daß ich jemals die Schriften dieses trefflichen Mannes in einer Folge gelesen habe, daß mir jemals das ganze Gebäude seiner Gedancken völlig überschaulich vor der Seele gestanden hätte. Meine Vorstellungen und Lebensart erlauben's nicht. Aber wenn ich hinein sehe glaub ich ihn zu verstehen, das heist: er ist mir nie mit sich selbst in Widerspruch und ich kann für meine Sinnes und Handelns Weise sehr heilsame Einflüsse daher nehmen.

(...)

Hier bin ich auf und unter Bergen, suche das göttliche in herbis und lapidibus.“<sup>29</sup>

---

<sup>29</sup> FA 2, 582-584

フリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービ宛

(木) 1785年6月9日

この前あなたから受け取った書を読んだ。ヘルダーと私は長い間躊躇して返事が遅れたことを悪いと思った。我々を許してください。私自身はこのような内容について文章として述べるのがあまり好きではない、否あまりにも不可能なことだ。

我々は次のことについてはじめから一致した。スピノザの教えについてのあなたの発想は、我々があなたの発言を聞いた後に想像したより我々の発想にもっと近づいている。あなたと話し合えたら完全に一致すると思う。

すべてのスピノザ主義の根源である最高の真実をあなたが認めている。すべてがこの最高の真実に基づいていて、そこからすべてが流れてくる。彼は神の存在を証明することはなく、すべての存在は神なのだ。そして他の人が彼をこれで無神論者と叱れば、私が彼を最も有神的でキリスト教徒的と呼んで賞賛する。

14日間前からあなたに書き始めたが、あなたの論文の写しをイルメンアウへ持って行った。時々読んでみたら、あなたに何も感想を述べるができなかったことを残念に思った。あなたの手紙（もとの Steckbrief の意味は「手配書」、ゲーテは恐らく良心を正すための手紙として捉えたのではないか—本稿筆者）の印章と標題が私の良心を磨いてくれた上でここまで深く考えさせた。

神的存在について話されている時に私はいつも黙っていることをお許してください。この神的存在を私は個々の事物から、そしてそこに内在するものから認識している。これをより身近に深く観察するように勧めるのはスピノザよりだれもできないが、彼の眼差しの前にすべての個々のものがなくなるようだ。

今まではこの優れた男の作品を次のような順番で読んだことがない。つまり、彼の思考の全体性を完全に魂で捉えたことがない。私の想像力と生き方がそれを可能にしない。しかし読んでみたら理解される気がする。というのは彼が彼自身と矛盾することがないので、私の意識と行いに良い影響を及ぼすからだ。「省略」

私はいたるところで神的なものを草や石のなかに探している<sup>30</sup>。

このようにゲーテがヤコービの原稿に言及している。ヤコービはスピノザを無神論者として称していたので、ゲーテは「他の人が彼をこれで無神論者と叱れば、私が彼を最も有神的でキリスト教徒的と呼んで賞賛する」と述べた<sup>31</sup>。実は当時にスピノザを支持するということは無神論であるとされ、異端者として見られた<sup>32</sup>。

<sup>30</sup> 筆者訳 FA 2, 582-584

<sup>31</sup> 参照 FA 2, 1093

<sup>32</sup> 参照 FA 2, 1106

## 第2章 ヤコービの『スピノザの教説について』の出版後の書簡（1785年～1786年）

当時にスピノザを支持するということは無神論であるとされ、異端者として見られた<sup>33</sup>ので、ゲーテが以下のヤコービ宛の手紙の中でこれに関しての恐れを述べている。

Goethe an F.H. Jacobi

SO. 11.9.1785

„Du sendest mir deinen Spinoza. Die historische Form kleidet das Werckgen gut.

Ob du aber wohl gethan hast mein Gedicht mit meinem Nahmen vorauf zu setzen, damit man ia bey dem noch ärgerlichern Prometheus mit Fingern auf mich deute, das mache mit dem Geiste aus der dich es geheisen hat. Herder findet lustig daß ich bey dieser Gelegenheit mit Lessing auf Einen Scheiterhaufen zu sitzen komme.“<sup>34</sup>

フリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービ宛

(日) 1785年9月11日

君が私にあなたのスピノザを送ってくれた。歴史的な形がこの作品をよく見せるね。しかし君が私の詩を名前付きで巻頭に掲げた結果、怒れるプロメテウスの詩に関しても人は私を名指すであろう。それが良かったかどうかを君にそれを命じた精神と共に決定するがいい。ヘルダーは私がこれがきかけになってレッシングと共に火刑の薪の山に座らされることをおかしがっている<sup>35</sup>。

ゲーテがヤコービから『スピノザの教説について』を送ってもらった直後の手紙である。

このようにゲーテはヤコービが『スピノザの教説について』の中で、ゲーテの承諾を得ず、匿名で「プロメートイス」と、ゲーテの名前を取り上げた「神性」を載せたことに関して発言している。「神性」の数ページ後に「プロメートイス」が掲載されたので、「プロメートイス」がゲーテによって書かれたことがすぐに明らかになることはゲーテの恐れであったが、この恐れは的中しなかった<sup>36</sup>。ギリシャ神話からとった対立行動を描写する詩は、同時代の背景にして神学批判的方向があった<sup>37</sup>。それ故、ゲーテは異端者として見られることを恐れていた。もう一つ読み取れるのはゲーテのこの出来事に対しての怒りであると言える。1785年9月11日、この同じ日に、ゲーテがシュタイン夫人宛の手紙の中でスピノザの書物を同封し、この出来事について次のように述べた。

<sup>33</sup> 参照 FA 2, 1106

<sup>34</sup> FA 2, 596

<sup>35</sup> 筆者訳 FA 2, 596

<sup>36</sup> 参照 G-Hb 1, 560

<sup>37</sup> 参照 FA 2, 1105



Goethe an Charlotte von Stein

SO. 11.9.1785

„Jacobi macht mir einen tollen Streich. In seinem Gespräche mit Lessing kommt doch das Gedicht *Prometheus* vor, ietzt da er seine Götterlehre drucken lässt, setzt er das andre Gedicht: *edel sey der Mensch!* Mit meinem Nahmen voraus, damit ia iedermann sehe daß *Prometheus* von mir ist. Wie du aus beyliegendem Wercklein sehn kannst.“<sup>38</sup>

シュタイン夫人宛

(日) 1785年9月11日

ヤコービが私にとつともないいたずらをした。彼のレッシングとの会話の中で「プロメテウス」という詩が出てきたのだが、今彼が自分の神々についての教義を印刷する時に、「人間は気高くあれ」というもう一つの詩を私の名前入りで巻頭に掲げたのです。その結果だれもが「プロメテウス」も私の作であることが分かるでしょう。同封した書物を見れば君も分かるよ<sup>39</sup>。

「人間は気高くあれ」と「プロメテウス」はゲーテによって書かれた詩であり、当時のゲーテのスピノザ論と関係がある。ヤコービはまず「人間は気高くあれ」、次に「プロメテウス」を載せた。ゲーテがこの手紙で述べている「人間は気高くあれ」はこの詩の最初の行であり、当時にこの詩のタイトルとして使われていた。初めて掲載されたのは1783年11月、『ティーフルター ジャーナル』(*Tiefurter Journal*)という雑誌の中であった。その後、1785年にヤコービの『スピノザの教説について』の第一版の中で掲載された。初めて「神性」というタイトルで掲載されたのは1789年であった<sup>40</sup>。この二つの詩の背景には、ヤコービがゲーテの承諾なしで、この著作の中に最初にゲーテの名を取り上げながら「人間は気高くあれ」を載せて、そして著者の名に触れずに「プロメトイス」を載せたという事実がある。

Goethe an F.H. Jacobi

SO. 26.9.1785

„Es war die Absicht meines letzten Briefes nicht dich in Verlegenheit zu setzen, oder dir eine Art von Vorwurf zu machen, wir wollen die Sache nun gehn lassen und die Folgen erwarten. Das Beste wäre gewesen du hättest pure den Prometheus drucken lassen, ohne Note und ohne das Blat, wo du eine besorgliche Confiskation reizest, alsdann hättest du auch wohl das erste Gedicht ohne meinen Nahmen drucken mögen u.s.w. Nun aber da es geschehen, mag denn die *Legion* ausfahren und die Schweine ersäufen.“<sup>41</sup>

<sup>38</sup> FA 2, 597

<sup>39</sup> 筆者訳 FA 2, 597

<sup>40</sup> 参照 G-Hb 1

<sup>41</sup> FA 2, 600

フリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービ宛

(日) 1785年9月26日

君を当惑させたり、あるいは君に何か非難めいたことを言おうとするのが、僕のこの間の手紙の目的ではなかった。あれはあれでそのままにして置こう、そして結果を待とうではないか。君がプロメテウスだけを印刷したり、注釈かページとかを付けなかったなら、それが一番良かっただろう。これによって差押えを挑発してしまった。そして最初の詩も私の名前なしで印刷した方が良かった。だがしかし終わってしまったことなのだから、悪霊のものが走り出して、豚どもを溺れさせるがいい<sup>42</sup>。

この手紙の中で、ゲーテはヤコービの出版物、そしてその中で勝手にゲーテの詩を載せたことに関して、自身の意見と述べている。さらに以下のヤコービ宛の手紙の中で、ゲーテがヤコービの書物とスピノザ主義についての考えを述べている。

Goethe an F.H. Jacobi

FR. 21.10.1785

„Daß ich dir über dein Büchlein nicht mehr geschrieben verzeih! Ich mag weder vornehm noch gleichgültig scheinen. Du weißt daß ich über die Sache selbst nicht deiner Meinung bin. Daß mir Spinozismus und Atheismus zweyerlei ist. Daß ich den Spinoza wenn ich ihn lese mir nur aus sich selbst erklären kann, und daß ich, ohne seine Vorstellungsart von Natur selbst zu haben, doch wenn die Rede wäre ein Buch anzugeben, das unter allen die ich kenne, am meisten mit der meinigen übereinkommt, *die Ethik* nennen müsste.

Eben so wenig kann ich billigen wie du am Schlusse mit dem Worte *glauben* umgehst, dir kann ich diese Manier noch nicht passiren lassen, sie gehört nur für Glaubenssophisten, denen es höchst angelegen seyn muß alle Gewißheit des Wissens zu verdunckeln, und mit den Wolcken ihres schwanckenden luftigen Reichs zu überziehen, da sie die Grundfesten der Wahrheit doch nicht erschüttern können.

Du, dem es um Wahrheit zu thun ist, befeleisige dich auch eines bestimmten Ausdrucks.“<sup>43</sup>

フリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービ宛

(金) 1785年10月21日

あなたの本についてあれ以上書けなかったことは勘弁してくれ。僕は上品ぶった無関心な振りしたくなかったのだ。この件に関しては僕の意見が君とは違うのは分かるね。

スピノザの哲学と無神論とは僕にとっては別物だ。

スピノザを読むとその著作自体からスピノザのことが理解できるものだ。そして彼の自然観を

<sup>42</sup> 筆者訳 FA 2, 600

<sup>43</sup> FA 2, 603-604

## ゲーテのスピノザ論

僕は共有しなくても、僕の自然観に一番近い本を一つあげようと言われれば、知っているなかでは『エチカ』をあげざるを得ない。

これと同様に僕が認めるごとができないのは結末のところで、君が「信仰する」という語の扱い方である。君のこうした流儀を僕は見過ごすことができない。こうしたやり方は信仰を気取る詭弁者たちにもみ相応しいものだ。彼らには知識の確実性を暗くしてしまい、うつろいやすい空中の王国の雲でもって覆い隠してしまうことがもっとも似つかわしいことに違いない。なぜなら真理の確固たる基礎を揺り動かすことは彼らにはできないからだ。真理が大切であると思うならば、君も確固たる表現を用いるように努めたまえ<sup>44</sup>。

このようにゲーテはスピノザ主義を無神論として捉えることにはっきり反対しているので、ヤコービとの意見も異なっている。この時にゲーテはスピノザの『エチカ』を直接に読み、その内容に納得し、判断することができた。さらにクネーベル宛の手紙の中でゲーテはヤコービの書物を「形而上学的な悪行」とまでも呼んでいる。

Goethe an Knebel

FR. 18.11.1785

„Jakobis metaphysisches Unwesen über Spinoza, wo er mich leider auch compromittirt, wirst du gesehen haben.“<sup>45</sup>

カール・ルートヴィヒ・フォン・クネーベル宛

(金) 1785年11月18日

残念ながら私をも巻き込んでしまった、ヤコービのスピノザに関する形而上学的な悪行を君も見ただらう。<sup>46</sup>

次のヤコービ宛の手紙はメンデルゾーンが『返書』の中でヤコービの『スピノザの教説について』に対して書いたものである。

Goethe an F.H. Jacobi

DO. 1.12.1785

„Was hast du zu den Morgenstunden gesagt? und zu den jüdischen Pfiffen mit denen der neue Sokrates zu Werke geht? Wie klug er Spinoza und Lessing eingeführt hat. O du armer Criste wie schlimm wird dir es ergehen! wenn er deine schnurrenden Flüglein nach und nach umspinnen haben wird! Machst du gegen Anstalten? Und wie?“<sup>47</sup>

---

<sup>44</sup> 筆者訳 FA 2, 603-604

<sup>45</sup> FA 2, 608

<sup>46</sup> 筆者訳 FA 2, 608

<sup>47</sup> FA 2, 608

フリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービ宛

(金) 1785年12月1日

君は「暁」について、そして新しいソクラテスが使ったユダヤの口笛について何を述べたか。彼はなんと賢くスピノザとレッシングを導入したことだろう。ああ、可哀想なクリスト教徒、君はどれほど苦しむことになるのだろう！君のぶんぶんなる羽根が蜘蛛の糸に巻き付かれてしまったね。対抗手段を取りますか。取るとすれば、どういう風にやりますか<sup>48</sup>。

この手紙の「暁」(Morgenstund)は1785年にベルリンで出版されたモーゼス・メンデルスゾーンの作品『暁－神の現存についての講義』(*Morgenstunden oder Vorlesungen über das Daseyn Gottes*, Berlin 1785)“を意味している。その中でメンデルスゾーンがヤコービのレッシングについての発言内容に異論を唱えた。この書物でメンデルスゾーンが汎神論論争を開始した<sup>49</sup>。そして「新しいソクラテス」はメンデルスゾーン自身を意味している。当時メンデルスゾーンは「パイドン」(Phaedon)というプラトンのソクラテス対話のタイトルを使って、現代的なソクラテス対話を書いたので、ゲーテによる「新しいソクラテス」と呼ばれた<sup>50</sup>。メンデルスゾーンはユダヤ人であったので、ゲーテはユダヤの口笛という言葉を使って、メンデルスゾーン作品を指している。

Goethe an Herder

MO. 20.2.1786

„Ich vermelde daß ich das Jüdische neuste Testament nicht habe auslesen können, daß ich es der Fr(au) v. Stein geschickt habe die vielleicht glücklicher ist, und daß ich gleich den Spinoza aufgeschlagen und von der Proposition: qui Deum amat, conari non potest, ut Deus ipsum contra amet, einige Blätter mit der grösten Erbauung zum Abendsegen studirt habe. Aus allem diesem folget daß ich euch das Testament Johannis aber und abermal empfehle, dessen Inhalt Mosen und die Propheten, Evangelisten und Apostel begreift.“<sup>51</sup>

ヘルダー宛

(月) 1786年2月20日

君に報告することがある。最新のユダヤの聖書はとても読み通すことができなかったので、それをもっと喜びそうなシュタイン夫人に送った。そして僕の方は家で夕べの祈りの時にスピノザの書物を開いて数ページを読んで：神を真に愛する者は、神も自分を愛してくれることを望んではならないという命題から、大いに教化されるところがあった。このすべてのことから私はあなたたちに「使徒ヨハネの遺言」を読むように繰り返し推薦したい。この著作の内容はモーゼや預

<sup>48</sup> 筆者訳 FA 2, 608

<sup>49</sup> 参照 FA 2, 1115

<sup>50</sup> 参照 FA 2, 1115

<sup>51</sup> FA 2, 625

言者や福音書記者と使徒たちを含んでいる<sup>52</sup>。

メンデルゾーンが 1786 年 1 月 4 日に亡くなった後に、彼の書『レッシングの友人たちへ』 (*Moses Mendelssohn an die Freunde Lessings*, Berlin 1786) が出版された。この書はヤコービのレッシングのスピノザ主義に対しての反論書であった<sup>53</sup>。「最新のユダヤの聖書」という言葉でゲーテはこの反論書を指している。

この段落では、ゲーテが「神を真に愛する者は、神も自分を愛してくれることを望んではならない」という『エチカ』の第 5 部定理 19 を引用している。この言葉をゲーテは『詩と真実』<sup>54</sup>の中でも引用している。この文章で表現されている「完全な無私精神」はゲーテの「最高の願望であり主義であり」そして生きた実践であった。

次のヤコービ宛の手紙の中で、ゲーテが更にヤコービの書物について議論している。

Goethe an F.H. Jacobi

Ilmenau (Fr.) d. 5. May 86

„Übrigens bist du ein guter Mensch, daß man dein Freund seyn kann ohne deiner Meynung zu seyn, denn wie wir von einander abstehn hab ich erst recht wieder aus dem Büchlein selbst gesehn. Ich halte mich fest und fester an die Gottesverehrung des Atheisten p. 77 und überlasse euch alles was ihr Religion heisst und heissen *müsst* ibid. Wenn du sagst man könne an Gott nur *glauben* p. 101 so sage ich dir, ich halte viel aufs *schauen*, und wenn Spinoza von der Scientia intuitiva spricht, und sagt: Hoc cognoscendi genus procedit ab adaequata idea essentiae formalis quorundam Dei attributorum ad adaequatam cognitionem essentiae rerum; so geben mir diese wenigen Worte Muth, mein ganzes Leben der Betrachtung der Dinge zu widmen die ich reichen und von deren essentia formali ich mir eine adäquate Idee zu bilden hoffen kann, ohne mich im mindesten zu bekümmern, wie weit ich kommen werde und was mir zugeschnitten ist.“<sup>55</sup>

フリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービ宛

イルメナウ、(金) 1786 年 5 月 5 日

ちなみに君はいい人間だ。君とは意見が違っても、友達でいられる。この本自体を読んではつきり分かったのは、我々の意見がどれほど違うかということだ。

僕はこの無神論者 (77 ページ) の神の礼拝を固く、より固く守っている。

そして君たちが宗教と呼び、そう呼ばずにいられないものを君たちに委ねておこう。同上。も

<sup>52</sup> 筆者訳 FA 2, 625

<sup>53</sup> 参照 FA 2, 625

<sup>54</sup> ゲーテ (1980) 『ゲーテ全集 10』 179 ページ。

<sup>55</sup> FA 2, 629

し君が神は「信じる」ことしかできない（101 ページ）と言うならば、僕は「観る」ことにずっと重きを置きたい。

スピノザは「直感知」（Scientia intuitiva）についてこのように論じ、述べている。

「精神のなかで十全であるような諸観念から、精神内に生ずる一切の観念は、同様に十全である」；これらのわずかの言葉を見ると勇気が湧いてくる。僕の人生を通して事物の観察に身を捧げようという勇氣だ。それらは手の届くものであり、その本質的形式から正当なイデを形作ることが望めるからだ。しかもどこまで行けるかとか僕に何ができるかとか全く思い悩む必要はないのだ<sup>56</sup>。

ここでゲーテがヤコービの書物『スピノザの教説について』の 77 ページにあると同じくスピノザを「無神論者」と呼んでいるが、先に述べたように自身は同じ見識ではなかった。逆にその神の礼拝を固く守っていくつもりだと述べている。ゲーテは既に 1785 年 10 月 21 日のヤコービ宛の手紙の中で、ヤコービの「信仰する」という語の扱い方に納得できなかったようである。ここでゲーテは『エチカ』の第 2 部定理 40 を引用し、スピノザの「直感知」（Scientia intuitiva）<sup>57</sup> という概念を取り上げている。このような認識はゲーテにとって究極で、最大の認識であり、彼が求めていたものであった<sup>58</sup>。

## おわりに

以上のことからゲーテはスピノザから決定的な影響を受けたことが分かる。彼は若いころからスピノザの影響を受け、生涯スピノザ派を離れなかったのである。ゲーテのスピノザに対する考えの多くは『詩と真実』の記述、そして書簡から見受けられる。ゲーテは当時の知人への書簡を通して、スピノザの思想について頻繁に議論していたので、当時のゲーテの考え方と心情が良く分かると言える。本研究ノートでは書簡の中で行われた議論を詳しく調べ、ゲーテがスピノザについて言及している書簡を 1783 年から 1785 年まで、時間軸に沿って取り上げた。序章ではゲーテがスピノザを研究した時期を紹介した。そして第 1 章と第 2 章では主に 1783 年から 1785 年の時期の書簡、つまりヤコービの『スピノザの教説について』の出版前と後に分けての汎神論論争をめぐる代表的な書簡を紹介した。

1785 年に汎神論論争によって喚起されたと共に、当時のドイツ語地域でのスピノザ受容が始まったと思われる。ヤコービが目指したスピノザ主義からの離脱は彼の作品の出版によって実現されず、逆に若い世代がスピノザの哲学を研究し始めた<sup>59</sup>。そのために、それまで無神論として異端視され、認

<sup>56</sup> 筆者訳 FA 2, 629

<sup>57</sup> 参照 Goethe (1993) 248

<sup>58</sup> 参照 Goethe (1993) 248

<sup>59</sup> 参照 Christentum und Judentum (2012: 47-48)

められなかったスピノザの哲学が一気に花開いた。すなわちスピノザの哲学が、無神論ではなく汎神論的であったとされ、一つの哲学として認められたのである。本研究ノートの中で、ゲーテの汎神論論争をめぐる代表的な書簡を取り上げて、当時の様子スピノザ受容の展開の一部を示した。

今後の研究課題としては、ゲーテの作品の中で彼のスピノザ理解がどのように言語で表現されているのかを調べる必要がある。

## 引用文献及び参考文献

(ドイツ語文献)

- Christentum und Judentum: Aktes des Internationalen Kongresses der Schleiermacher-Gesellschaft in Halle, März 2009.* Hrsg. Von Roderich Barth et.al. Walter de Gruyter GmbH & Co., Berlin, 2012.
- Goethe Handbuch. Gedichte.* Bd. 1. Hrsg. von Regine Otto und Bernd Witte, Verlag J.B. Metzler, Stuttgart, 1996. (略記号: G-Hb 1)
- Goethe Handbuch, Personen Sachen Begriffe L-Z,* Bd. 2. Hrsg. von Hans-Dietrich Dahnke und Regine Otto, Verlag J.B. Metzler, Stuttgart, 1998. (略記号: G-Hb 2)
- Goethe Sämliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche 23. Mai 1764 - 30. Oktober 1775.* Hrsg. von Wilhelm Große et al. Bd. 1, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1997. (略記号: FA 1)
- Goethe Sämliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche 7. November 1775 - 2. September 1786.* Hrsg. von Hartmut Reinhardt et al. Bd. 2, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1997. (略記号: FA 2)
- Goethe Sämliche Werke. Schriften zur allgemeinen Naturlehre, Geologie und Mineralogie.* Hrsg. von Wolf von Engelhardt und Manfred Wenzel et al. Bd. 25, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main 1989. (略記号: FA 25)
- Goethe, Johann Wolfgang: *Dichtung und Wahrheit.* Phillip Reclam jun., Stuttgart, 1993.
- Johann Wolfgang Goethe *Tagebücher. 1809 bis 1812. Text.* Hrsg. von Edith Zehm et al. Bd. 4,1, Verlag J.B. Metzler, Stuttgart, 2008. (略記号: GT 4,1)
- Johann Wolfgang Goethe *Tagebücher. 1809 bis 1812. Kommentar.* Hrsg. von Edith Zehm et al. Bd. 4,2, Verlag J.B. Metzler, Stuttgart, 2008. (略記号: GT 4,2)
- Johann Wolfgang Goethe *Tagebücher. 1813 bis 1816. Text.* Hrsg. von Wolfgang Albrecht. Bd. 5,1 Verlag J.B. Metzler, Stuttgart, 2007. (略記号: GT 5,1)
- Johann Wolfgang Goethe *Tagebücher. 1813 bis 1816. Kommentar.* Hrsg. von Wolfgang Albrecht. Bd. 5,2 Verlag J.B. Metzler, Stuttgart, 2007. (略記号: GT 5,2)
- Spinoza, Benedictus de: *Die Ethik,* Philipp Reclam jun., Stuttgart, 2007.

(日本語文献)

- エッカーマン (2001) 『ゲーテとの対話 (中)』 山下肇訳 岩波書店
- ゲーテ (1980) 『ゲーテ全集 10』『詩と真実』 河原忠彦訳・山崎章浦訳 潮出版社
- ゲーテ (1981) 『ゲーテ全集 15』『書簡・他』 小栗浩ほか訳 潮出版社
- 森林太郎 (1924) 『鴉外全集 9』『ギョオテ伝・哲学』 森鴉外全集刊行会